

大学教育再生加速プログラム テーマⅢ（高大接続）
平成28年度事業
杏林大学「日英中トライリンガル育成のための高大接続」第三者評価報告書

【第三者評価委員会開催】

日時：平成29年9月16日（土）14：00～15：20

場所：杏林大学 三鷹キャンパス 本部棟11階 貴賓室

評価委員：委員長 平方邦行氏（工学院大学附属中学校・高等学校 校長）→ 欠席

委員 鈴木 栄氏（東京女子大学 教授）

委員 藤井達也氏（埼玉県立伊奈学園総合高等学校 教諭）

杏林大学参加者：跡見 裕学長、ポール・スノードン副学長、坂本ロビン外国語学部長、
稲垣大輔高大接続推進室長、青柳貴徳副部長、晝間大郎課次長

各評価委員の第三者評価書と評価委員会での追加の指摘等をもとに、以下に評価の概要を記す。個別の評価については、添付の第三者評価書を参照されたい。

【評価の概要】

平成26年度にスタートした「日英中トライリンガル育成のための高大接続」事業は、過去2年間の実施を踏まえ、3年目となる昨年度はその構想した事業の完成期を迎えつつある充実した年度であったと全体的に評価することができる。

文部科学省は、高校教育の改革・入試改革・大学教育の改革の三位一体の高大接続改革を進めている最中であり、杏林大学の全学的グローバル教育推進の中に位置づけられた高大接続事業は、杏林APラウンドテーブルという場において、高校側と大学側の意見交換をもとに、高校側の教育理念に適合するように調整しながらスタートしており、それが高校の教員・生徒の主体性を喚起し、同時に連携という協働性を生み出す開放性につながっている。つまり、与えられた問題を解いて終わりではなく、問題を自ら発見し、創造的問題解決を果たそうというモチベーションが生まれている。

ルーブリックについてはさらに改良が進み、コンセプトブックができていて、AO入試など、学習履歴の書き方が生徒に公開されており、入試を行う以前に自己評価によって、自己変容のための契機を創り出すモチベーションを内燃させることが期待できる。

アドバンストプレイスメントは、非常に興味深い取り組みだが、既にアドバンストプレイスメントに係るラウンドテーブルも引き続き開催され、大学間でのその単位互換協定締結による新たな枠組みにも期待がかかる。

言語能力のルーブリックのレベルは、グローバル人材を目指す教育であるならばB2レベルを目指すべきである。

ルーブリックやアドバンストプレイスメントなどもwebを利用することで、eポートフォリオや反転事業によるアクティブラーニングへの発展が期待される。職業選択という点で、実際に英語や中国語を使い仕事をしている卒業生や、会社の人からの話を聞き、ワークショップに参加することで、言語を使用する仕事のビジョンが明確になると思われる。

トライリンガルキャンプなどを通して、英語・中国語・日本語を使った活動、及びそれぞれの文化理解のきっかけは実施されているので、今後は、この3つの言語を同様に使いこなすことのできる人材育成の取り組みを進めてほしい。

事業報告書の中で、例えばキャンプなどに参加した高校生の生の声をもう少し具体的に表記したり、事業遂行上の問題点を書き残すことで、後につづく大学、高校への有益な示唆とすることができる。

【評価のまとめ】

平成28年度事業は前年度に比べさらにその成熟度を増しており、引き続き他大学および高校の3つのポリシーデザインに対しロールモデルとなることが期待できる。また、ルーブリックを利用したAO入試に向けて準備が整い、その本格的な実施に期待が高まる。また、アドバンストプレイスメントの本格的な実施に向けての準備が整いつつあり、さらに大学間の単位互換協定締結という新たなAPの形が実現することにも注目したい。

【添付資料】

第三者評価書3通

- ・平方邦行委員長
- ・鈴木 栄委員
- ・藤井達也委員

【評価のための根拠資料】

- ・平成28年度大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）調書
- ・日英中トライリンガル育成のための高大接続 事業報告書 平成28年度

以上

第三者評価書

評価対象： 杏林大学「大学教育再生加速プログラム」（申請テーマⅢ：高大接続）
「日英中トライリンガル育成のための高大接続」
平成 28 年度事業実績

評価者：所属：工学院大学附属高等学校校長
氏名：平方邦行

総評：平成 28 年度「日英中トライリンガル育成のための高大接続」事業は以下の点で、成果があったと評価できる。

- ① 杏林 AP ラウンドテーブルの連携の広がりの実現。
- ② AP ラウンドテーブルが、高等学校、自治体、大学へと確実に広がりを見せている。
- ③ AP 実施準備が広がっている。
- ④ AP 実施に向けてセミナー活動が充実してきた。
- ⑤ AP 実施に向けて高大連携による「授業」が拡大している。
- ⑥ AP 実施に向けて行われている高大連携のライティングなどの授業の形態が、将来、ICT を活用して、パーソナライズドラーニング、もしくはアダプティブラーニングに発展する土台づくりになっている。
- ⑦ ルーブリックのいわばコンセプトブックができていて、AO 入試など、学習履歴の書き方が生徒に公開されている。
- ⑧ ルーブリックの書き方が公開されていることによって、入試を行う以前に自己評価によって、自己変容のための契機をつくり出すモチベーションを内燃させることができるが、そのような期待ができる。
- ⑨ ルーブリックを活用するには、生徒が探求活動を自ら主体的に行う体験場が必要になるが、グローバル AP の活動、様々なセミナー、大学の教授による連携授業など、日常の学園生活では体験できない場に参加できることが、ルーブリックを活用する場を生徒に広げる結果となっている。
- ⑩ 多様な高等学校との高大連携が行われているが、大学側がテーマや講義を用意して、それを与える形ではなく、会議を繰り返し、高等学校の教育理念に適合するように調整しながらスタートしているところが、高等学校の教員・生徒の主体性を喚起し、同時に連携という協働性を生み出す開放性につながっている。
- ⑪ したがって、与えられた問題を解いて終わりではなく、問題を自ら発見し、創造的問題解決を果たそうというモチベーションが生まれている。これは AP を達成するのみならず、大学入学後の探求のテーマに気づく機会であり、同時に大学卒業後の自分の未来のキャリアデザインを描く端緒になっている。

改善すべき点：

- 杏林 AP ラウンドテーブルの連携の広がりや実施の結果は可視化されているが、連携の広がりを行っている議論の過程がフローチャート化されると評価の精度があがるのではないかと。
- AP ラウンドテーブルが、高等学校、自治体、大学へと確実に広がりを見せているが、英語の CEFR の基準設定が低くないか。たとえば、SGH 指定校・アソシエイト校は、B2 を目指すことが SGH 校の条件である。
- AP 実施の際、Project based Learning がなされるとよいのではないかと。年間通しての試みになるので、教授陣がサポートし続けることは難しいが、大学生や大学院生によるチューターを起用するというのはいかがだろうか。
- その際、大学生や大学院生は、自分の研究テーマを高校生とリサーチできる企画を提案し、学生のインターンシップや就活時のポートフォリオにもつながるメリットを生み出すことで、高大連携が起業家精神も創出することにならないだろうか。
- AP 実施に向けてのセミナーの評価体制は、ループリックなどによって行われていると思うが、そのデータが公開されると今後の第三者評価システムが充実する。
- AP 実施に向けて行われている高大連携のライティングなどの授業の形態が、将来、ICT を活用して、パーソナライズドラーニング、もしくはアダプティブラーニングに発展する土台づくりになっているのであるから、次のステップとして、ブレンディドラーニングに進むプランがあってもよい。イメージはミネルバ大学のアクティブラーニング・フォームである。
- ループリックは、Web 上で書き込めるようにし、書き込んだ後、データが自動的にグラフ化され、自分の学習のプロセスや成果を自己分析できるようにするとよいのではないかと。
- もちろん、その行き先は e ポートフォリオで、AP 連携大学共通のプラットフォームをつくり、連携各大学のアドミッションオフィスで、共有できるようにする。コンプライアンスや個人情報保護などのセキュリティは大前提である。
- この e ポートフォリオには、チュータリング制度やピアレビューのシステムを追加できるから、主体性・多様性・協働性をサポートするプラットフォームにもなる。
- AP の一環として、三鷹市・羽村市・八王子市と中国の都市との「超スマートシティ構想」について、探求するプロジェクト型の活動を企画するゼミがあってもよい。比較都市論、都市文化論、都市設計、各種インフラと保健衛生、少子高齢化対策、自然環境と都市生活、税金システムの最適化など多角的複眼的に探究する企画をし、その企画コンテストを、各自治地体が毎年順番で行っていく。コンテストで優勝したチームは、補助金が出され、企画を実施する。
- これによって、「言語の学び」、「高次思考」、「リサーチ → 議論 → 編集 → プレゼン」などのアカデミックスキル、「問題解決能力」が養われるばかりではなく、平和を教育と学問で生み出す学びのグローバルコラボレーションのプロトタイプができあがる。
- そうなってくると、今のループリックのレベルあるいは次元では足りないということになる可能性が出てくる。グローバルな問題解決をするときに必要な能力とは何かの仮説を立てて、その検証のためにも、この「教育と学問によるグローバルコラボレーション」のプロトタイプづくりのプロジェクト学習を立ち上げ、そのドキュメントをサイトやメディアで発信することによって、杏林大学の役割の重要性について、社会的インパクトを与えられるのではないかと。

第三者評価書

評価対象： 杏林大学「大学教育再生加速プログラム」（申請テーマⅢ：高大接続）
「日英中トライリンガル育成のための高大接続」
平成 28 年度事業実績

評価者：所属：東京女子大学
氏名：鈴木 栄

総評：

平成 26 年度から始動した「日英中トライリンガル育成のための高大接続」事業は、2 年間の実施を踏まえた平成 28 年度の本格実施により、杏林大学が構想した事業を完成したという評価ができると思います。

グローバル人材育成のための教育は、多くの教育機関で進められていますが、その多くは、英語による発信力の強化に特化しています。杏林大学の取り組みは、日本語・英語・中国語のトライリンガル育成を目標にしたユニークな取り組みです。多言語教育を進めているヨーロッパを見ますと、母国語以外にいくつかの言語ができる人材がこれからの世界では求められることを予感することができます。世界共通語としての位置を持つ英語だけではなく、近隣の国の言語を学ぶことで地域世界の共通理解に役立つことでしょう。アジアに位置する日本では、近隣の国の言語として、中国語・韓国語を身につけることは必須となると考えられます。そうした流れの中で、杏林大学がいち早くトライリンガル育成を打ち出したことは高く評価されると考えます。

昨今、大学の地域貢献が求められていますが、杏林大学のプログラムにおける、高校との連携による様々な取り組みは、様々な点で国際教育の推進に役に立つと考えます。高校側からしますと、大学での学習を見据えた教育をおこなうことができます。大学側は、高校生がどのような知識や力を身につけて大学に進学するのかを理解することができます。また、トライリンガルキャンプやコンテストでは、高校生と大学生が交流を深める機会を作ることができます。高校側は、大学の様々な取り組みに参加することにより、高校における言語教育活動のヒントを得ることができます。大学で提供したような活動が、高校でも広がるのが期待できます。

平成 29 年度より実施予定の「アドバンスト・プレイズメント」についての話を複数の大学や高校間で何度か実施し、実現へ向けて具体的な話を詰めて来たようですが、これが実現しますと、高校生は、高い学習目標を持ち学習に向かうことができます。「アドバンスト・プレイズメント」は、日本国内では、例を見ない取り組みですので、成果が期待されます。

改善すべき点：年度を経て充実した取り組みが展開されています。改善すべき点は特にありませんが、平成 28 年度の実施項目についての感想を記します

① アドバンスト・プレイズメントについて

アドバンスト・プレイズメントは興味深い取り組みです。実施にあたり、大学側と高校側で異なる課題（注意点）があるかと思いますが、それを報告書に残していただけると、他大学・

高校関係者への参考になると思います。具体的には、授業時間への配慮、評価方法、受け入れ人数、学生（生徒）への対応、授業参加の際の交通費への検討、などです。

② プレゼンテーションコンテスト

高校生が発表するコンテストは数多くはありません。県によっては、教育委員会が設定しているところもありますが、実施に向けて課題が多い実情があるようです。大学が、このようなコンテストを実施し、高校生が参加できることは、生徒にとって有意義な経験になります。参加生徒は、高大接続している高校からの参加のようですが、見学だけでも、接続の無い地域の高校からの参加が可能になるとよいかと思います。

③ 日出学園高等学校の英語教育

日出学園と協働で英語教育プログラムを開発しているようですが、具体的な内容についての報告があると参考になると思います。

④ 職業選択

昨年の第三者評価委員会で、「外国語ができることが将来の職業や生き方にどのように繋がるのかを示すことで生徒や学生が目標を持つことができるのではないか」というまとめがなされましたが、本年度は、それを受けて、「同時通訳ブース見学会」が開催されました。高校生にとっては、実際の通訳ブースを見学することで、通訳への動機付けを強めた生徒もいることでしょう。こうした、職業選択に繋がるような試みをさらに発展されることを願います。実際に英語や中国語を使い仕事をしている卒業生や、会社の人からの話を聞き、ワークショップに参加することで、言語を使う仕事のビジョンがはっきりとしてくると思います。

⑤ トライリンガル育成

トライリンガルキャンプなど様々な取り組みをされています。英語・中国語・日本語を使った活動、およびそれぞれの文化理解のきっかけはすでに実施されています。今後は、3つの言語を同様に使いこなすことができる人材育成の取り組みがおこなわれることを期待したいと思います。

第三者評価書

評価対象： 杏林大学「大学教育再生加速プログラム」（申請テーマⅢ：高大接続）
「日英中トライリンガル育成のための高大接続」
平成 28 年度事業実績

評価者：所属：埼玉県立伊奈学園総合高等学校
氏名：藤井達也

総評：

少子高齢化が進み社会全体に閉塞感が漂う中、教育現場も社会の変化と無縁ではなく、中長期的展望が持てないでいると言ったら言い過ぎだろうか。例えば、年金制度の変化に伴う教師の高齢化や多忙化も教師を今日明日のことしか見えなくしている。部活動の問題一つ取ってみても、本来は教師と生徒の両方に関わり方が問われなければならないが本質的な議論がなされているとは言い難い。

グローバル化が叫ばれて久しいが、グローバル化＝「英語をやらなければ」の単純な思考からあまり変化がない。若手教員の中にも大学在学中に第二外国語を履修しなかったものが多くなり、英語以外の言語を学ぶことに価値・積極性を見いだせていなかったり、英語圏（主にアメリカ）の価値観・文化がイコール海外の文化であるような思いこみが散見されたりする。教育現場の教える側にも、近年の教育における変化の負の面が現実に肌で感じられる昨今である。

高校生と彼らの保護者にも、進学先を考える際に世間的な評価のみに左右され、学ぶ内容や学びによって得られる力がどのようなものであるべきかを考えようとし「受かればいい、進学できればいい」といった傾向もみられる。また、高校の教員の側にもそういった保護者の要求に短絡的に答えようとする傾向もあり、真の意味で生徒たちに思考力・表現力・発表力・問題解決能力・協働して作業する力などを伸ばそうとすることに、ともすれば、あまり肯定的な雰囲気生まれにくいという残念な状況も存在する。

2020 年度から始まるいわゆる「大学入試改革」も、その「対応」を受験産業の売りに利用されたり、その狙いとは裏腹にどうすれば点数を獲得できるかにフォーカスされたりしてしまい、またそれに飛びつく受験生やその家庭も少なくないだろう。もともとの目的を十分に反映できるか難しい面もある。高校側もそれに追随してしまったら「入試が変わらなければ授業が変わらない」というのは、単に現場の言い訳だった、ということになりかねない。

現在高校生・大学生に目を向けると、何かを問われても単語と感嘆詞で答え、自分の周りを標準とし「普通○○じゃないですか」という表現を多用し、主体的価値観を持ちがたい若者が多く見られる状況は、因果関係ももはやはっきりとせず種々の要因がからみあったもので、改革・変革と口にするのは簡単だが、実際には快刀乱麻を断つというようなわけにはいかない。

過去のいくつかの「委嘱事業」などの例を見ても、その期間はよい活動ができて、その事業が終わると「より戻し」現象が起きてしまうことも多い。

非常に悲観的な表現を並べてしまったが、決して容易ではない社会全体の状況下において本事

業が地道にかつ意欲的にそして継続的に行われていることは、それだけに評価されるべきものと言いたかったからだ。一昨年度、昨年度とこの評価委員会だけでなく、「杏林 AP ラウンドテーブル」、「連携高等学校との意見交換」、「アドバンスド・プレイスメント・ラウンドテーブル」を開催しながら、それまでに行ってきたものに改善を加えてきた。その努力の継続は大いに評価されるものである。昨年も述べたようにアドバンスドプレイスメントの理解は高大ともにまだまだ十分とは言えないのが現実であるかもしれない。また理解が進んだとしても実現するには、高大相互の教育現場の実情を理解する必要がある。高校側の声に真摯に耳を傾け、高校サイドの学校行事や日程、高校生の生活状況に合わせてできるだけ参加しやすい条件整備を進めてきたことはすばらしい。今後も参加校・参加者を拡大させながら継続していくことが望まれる。近隣の大学・高校関係者による「アドバンスド・プレイスメント・ラウンドテーブル」が2月に行われたあと、さらに2回開催され意見交換が行われ、昨年よりも一歩進んで大学間の単位互換に向けて議論が進んだことは、高校生にとって魅力的なものに近づく可能性が大いに増す。並行して進められた「大学教養レベル」・「グローバル関連科目」・「COC 関連科目」の開放は、アドバンスド・プレイスメントのさらなる社会認知が進み、多くの高校関係者の理解の深まりと広がりが期待できる。「夏期集中講座」は高校生にとって参加しやすいものであると同時に、科目によっては他の活動とつながりを持たせていける(「口語中国語」を受講した上で「日英中トライリンガルキャンプ」の活動に学んだことを生かすなど)ことも考えられる。

歴史上に起きたパラダイムシフトといわれるものも、現在から眺めると突然起きたように見えるが、短期間の急激な変化はなく、実際には世代交代が進むくらいの時間を要していると聞いたことがある。正しいと考えたものを実践し、今までより良いものを追い求める人々の努力が持続しえた場合に定着するのである。

FD/SD は広く大学・研究機関で行われているところであるが、とりわけて本事業で評価できるのは、高校の教諭の講演を聴き意見交換を行っていることである。高大のギャップを埋める活動としてこれからも継続して行くことが望まれる。

「日英中トライリンガルキャンプ」では、英語を使って日中の高校生活を比較し相対化する活動を通して、自身の語学力向上や異文化理解に対する動機づけをもったとのことであるが、活動自体の成果と同時に、こうした活動を通して、貴学の高校生や高校の教育活動に理解が深まり、ルーブリックの改良にもつながっているように思える。改良されたルーブリックは高校生にとってより取り組みやすいものになったと考えられ、高校1年次生のころに目に触れるようになれば、大学の求める学生像が伝わり、どのような高校生活を送るべきかが自ずと意識されるようになるだろう。

また、「エンパワメントセミナー」・「プレゼンテーションコンテスト」の実施によって高校生の大学の教育活動への参加形態に広がりを持った。活動のあり方は参加者のスキルや習熟度に応じて準備されることにより、より多くの参加が期待される。

昨年感じた高大接続・高大連携が全学的に波及されつつあるということは今年もさらに感じることができた。「中国語の朗読」・「同時通訳ブースの見学会」・「職場見学」、「インターンシップの提供」、「付属看護専門学校の戴帽式の建学」など加速度的に貴学の多方面にわたるリソースの活用が広がっていることは喜ばしいことである。「同時通訳ブース見学会」では終了後にセミナー修了証が付与されたことは高校生にとって心理的にもプラスになったことと思われる。出張講義

なども含め、高校側の要請に広くこたえている。今後も学際的で高校生の知を刺激し視野を広げ、学習の動機付けとなるアクティビティーをデザインしていただけることを期待する。

改善すべき点：

事業そのものについては、昨年度までの実績に加え、連携協定を締結した高等学校増やし、意見交換を進めながら新たな活動を創出してきており、着実に発展してきていると思われる。改善すべき点と言うよりも、以下に気づいたことをあげさせていただく。

1.事業報告書の中で、例えば「日英中トライリンガルキャンプ」で行われた活動の成果を実際のスライドやスピーチの一部などが見られるとより分かりやすいと思われる。参加者の感想も参加する前と参加したあとの変化や成長が示されるような提示があると活動の成果がより伝わりやすいのではないかとされた。

1年目から継続的に行われている活動についてはその発展の過程が視覚化されるとより分かりやすいと思われた。

2.中国の高校生とも SNS でやりとりをする生徒も増えてきた。中国語の入力方法やメールでよく使う表現など平易な作文に興味を持って取り組める講座はできないか。

3.28年度は開放された講座が増え、また活動も多様化した。学習者にとって入門的な科目、それを受講したあとの発展的な科目、というようにレベルを階層的に用意されると、学習者の進学後目的意識、意欲の強化が期待されるのではないか。

4.前述のように本事業は量的に質的に発展してきていると思われる。事業を進める上で障碍となる事柄や問題となる点があれば、報告書にあげていただくなどして共有できた方が共に考えていくことができるのではないか。

まとまりのない、感想めいたものとなってしまう大変恐縮であるが、本事業の今後のますますの発展に期待をしています。